

1. 社会科

〈目的〉

東南アジア地域の自然環境や歴史・文化、経済等についての知識を獲得し、それに基づいて日本との比較を意識しながら探究活動を行う。探究活動を通じて、それぞれの国・地域の人々が持続可能な成果を享受することができる関係を築いていくことをめざす。また、生徒の創造性・科学的な思考力・判断力を養うとともに、グループ活動に必要な自主性・協調性を育成する。また、それぞれの探究の成果について発表する機会や論文としてまとめる機会を設け、プレゼンテーション力や報告書作成力の向上も図る。

〈内容〉

本年度のSGHアジア探究（社会系）講座は、月曜日5時限（以下月曜班と呼ぶ）および木曜日5時限（以下木曜班と呼ぶ）を中心とした2講座の開設となった。また、指導担当は月曜班には黒田教諭・伊藤教諭2名および大阪教育大学大学院教育実習生の水野氏、木曜班には濱辺教諭・伊藤教諭・六反田非常勤講師の3名が当たることになった。

また、本講座はその取り扱う内容と定員の都合上、昨年度は文系の生徒に限定して受講希望を募集したが、本年度は定員数を1.5倍に拡大させたことおよび探究方法に変化を持たせるため、文系・理系を問わず募集することとした。その結果、月曜班、木曜班ともに19名の生徒から構成されるに至った。内訳は月曜班は文系13名、理系6名、木曜班は文系9名、理系9名である。両班ともに、期間の多少のずれはあるものの、年間を通じて同内容で並行して講座を進めた。

1. 活動の場所、方法（手段）および記録

本講義はその取り扱う内容の性格上、調査対象の舞台となる東南アジアに関する文献が最も充実している図書館閲覧室を主たる講義・活動の場所とした。また、プレゼンテーションの準備や練習をするために視聴覚室も適宜利用した。

また、主に自由探究する方法も特に制限を設けず、文献以外にもスマートフォン等の持ち込みを認め、必要に応じ使用してもらった。

そして、1時間の活動や得た内容を記録するために、毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリント「研究ノート・メモ」を生徒に配布した。この中に1時間の探究内容を記録をさせ、当授業時または次授業時に回収した。その内容を担当教諭間で確認し、探究の進み具合を共有することとした。

研究ノート・メモ（探究活動・ワークショップ）		
記入者	組 番 氏名	グループ名
活動日時	4月24日（月） 13:55 ~ 15:00	
活動場所	視聴覚室・図書館	
指導・出席者		
調査国		
この国に興味を持った理由を説明してください。		
この国が海外に誇れるアピールポイントを3つ説明してください。		
※提出日時 次回授業時		

〈研究ノート・メモ〉

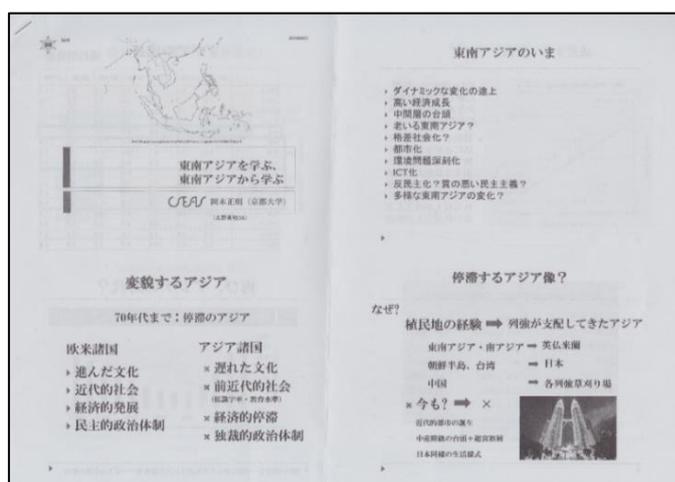
2. 日程

	月曜班(時間数)	木曜班(時間数)	活動内容
①	4月16日(1)	4月12日(1)	・課題研究説明会
②	4月23日(1)	4月19日(1)	・講義「なぜ課題研究をするのか」 ・講義「課題研究の進め方」 ・説明「SGHについて」
③	4月21日(1)	4月21日(1)	・岡本正明氏 (京都大学東南アジア研究所教授) 講演 「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」
④	5月上旬 ～5月中旬(2)	4月下旬 ～5月上旬(2)	・導入～東南アジアの国に関する調べ学習 ・グループ編成
⑤	5月下旬 ～6月下旬(4)	5月中旬 ～6月中旬(4)	・テーマの設定 ・テーマの絞り込み・設定 ・テーマに関連する自由探究
⑥	7月上旬 ～7月中旬(2)	6月下旬 ～7月中旬(3)	・進捗状況報告会・意見交換会 ・進捗状況報告会・意見交換会を受けて検討 ・夏季休業期間中の探究活動計画
⑦	8月下旬 ～9月上旬(3) (ワークショップは 9月3日)	8月下旬 ～9月上旬(2) (ワークショップは 8月30日)	・第1回ワークショップに向けて質問事項整理 ・第1回ワークショップ ～東南アジアの情報に関するアドバイス～ ・第1回ワークショップを受けて問題点を検討
⑧	9月中旬 ～10月下旬(3) (ワークショップは 10月3日)	9月中旬 ～10月下旬(6) (ワークショップは 10月4日)	・中間発表準備 ・第2回ワークショップに向けて質問事項整理 ・第2回ワークショップ ～東南アジアの情報および中間発表に向けて内容・論点等に関するアドバイス～ ・第2回ワークショップを受けて問題点を検討 ・中間発表最終準備
⑨	10月27日 (1)	10月27日 (1)	・中間発表
⑩	11月上旬 ～1月下旬(8)	11月上旬 ～1月下旬(8)	・中間発表を受けての内容再検討 ・テーマに関する自由探究 ・発表内容の最終仕上げ ・発表内容の英訳 ・最終発表直前準備
—	1月12日(1)	—	・SGH課題研究発表会 (主催：大阪教育大学附属平野校舎)へ参加 参加チーム：月曜インドネシアチーム

⑪	2月 2日(1)	2月 2日(1)	・最終発表
⑫	2月上旬 ～2月中旬(2)	2月上旬 ～2月中旬(1)	・論文作成
—	3月23日(1)	—	・SGH 甲子園 (主催：関西学院大学)へ参加 参加チーム：月曜ラオスチーム

3. 活動内容詳細 (以下「2. 日程」の番号に即して記す)

- ① 課題研究の各講座の概要について説明を、月曜班、木曜班それぞれ1時間を費やして行う。その後、生徒に講座の希望を提出させ、講座編成を行った。その結果、社会系(月曜班)、社会系(木曜班)ともに19名ずつの生徒から講座が構成されることとなった。
- ② 課題研究の意義、進め方についての講義およびSGHについての説明を行った。通常の課題研究とは違うSGH課題研究の特殊性も併せて知ってもらうことが狙いである。
- ③ 京都大学において岡本正明氏(本校卒業生:京都大学東南アジア地域研究研究所教授)による講演「東南アジアを学ぶ、東南アジアから学ぶ」をSGH課題研究選択生徒は原則として聴講する。岡本氏は本校のSGHの取り組み発足以来、課題研究などの探究活動に対してご指導をいただいている。講演の内容は、東南アジアを中心としたアジアの経済成長およびそれに伴う経済格差問題、ICT化など多岐にわたるもので、最後に日本と東南アジア双方の視点から見たそれぞれに対する関りについて説明をいただいた。生徒達にとって「東南アジア」のダイナズムを感じとり、「東南アジア」探究に対する興味をさらに深くする非常に有意義な時間となった。



〈講演レジュメより〉

- ④ 実質的には当時期より生徒たちによる探究活動がスタートした。
まず、中間発表、最終発表を経て論文の作成に至る年間のスケジュールを活動予定内容も含めて説明した。その際、極めて限定的な活動時間のため、スケジュール感を持って効率的に進める必要性を強調しておく。また、情報共有などの際に必要となるお互いのコミュニケーションツールを早期に確立させておくことも伝えた。

次に生徒それぞれが1か国ずつ分担して、「東南アジア」地域の全11か国を対象に以下に挙げる共通のテーマを調査、発表してもらおう。国の割り振りは、個々の希望も生徒同士の相談によって、うまくなされていたようである。

共通テーマ

その1「この国に興味を持った理由を説明してください」

その2「この国が海外に誇れるアピールポイントを3つ説明してください」

発表は、黒板に調査結果の要点のみを表現し、約3分間の発表をする。その間、聴き手側も内容について要点や気づいた点を記録させる。これらの個々の活動に対し、「テーマに沿った調査」、「調査内容の取りまとめ」、「発表の仕方」等について指導担当から助言や感想をその場で添えた。

- ⑤ 「探究したい国(3カ国)とそれぞれの課題(2点以上)」の希望を個々に提出させた。可能な限り希望に沿うこととするが総合的に見て希望に近い生徒の6名ないしは7名のチームを月曜班、木曜班それぞれ3チーム編成した。

次に各チームの探究する国(対象国)とテーマを決めさせる。チーム内で個々の意見を尊重しつつ、折り合いをつけて一丸となって取り組める内容が必要となる。探究する内容として面白味のあるものか、無理のないものか、チーム内で議論が交わされている。手分けをして、現代の課題、研究事例を調査したり、時には探究方法、結論を想定しながら国とテーマを絞り込んでいる。結論として、決定した内容は次のとおりである。

月曜班 対象国：ベトナム テーマ：観光 (7名)

対象国：インドネシア テーマ：オリンピック (6名)

対象国：ラオス テーマ：鉄道 (7名)

木曜班 対象国：東南アジア全般 テーマ：教育 (6名)

対象国：マレーシア テーマ：民族間の格差 (6名)

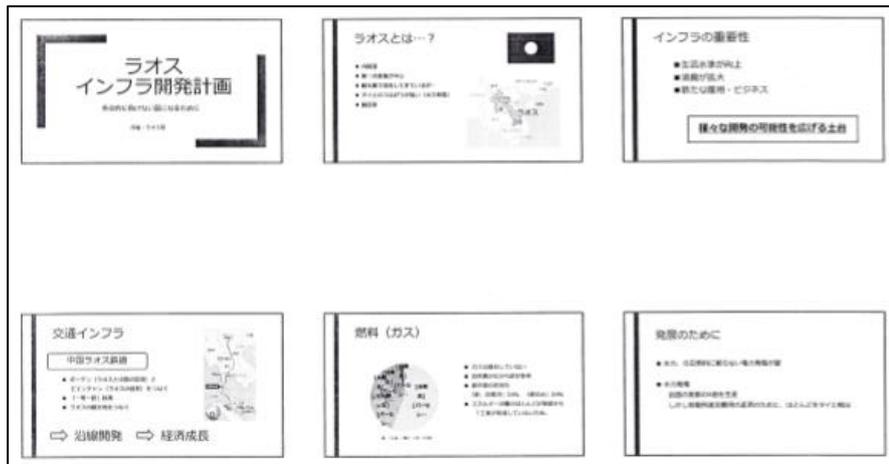
対象国：シンガポール テーマ：IR・統合型リゾート (7名)

(以下 月曜 ベトナムチーム・インドネシアチーム・ラオスチーム

木曜 東南アジアチーム・マレーシアチーム・シンガポール と表現する)

上記を一見しただけではわかりづらいが 実は対象国あるいは地域から政策の成功例・失敗例を学び、日本ないしは他国に応用しようとするものが多くなっていることが本年度のテーマの特徴となっている。

- ⑥ 進捗状況報告会・意見交換会を実施した。日は浅いながらも探究した内容をまとめ、報告をすることにより、今後(特に夏季休業)における探究活動の指針を明確化することができた。意見交換会では、相互の発表から、気づき合う、または学び合う力を持ってもらうこともできたようである。



〈报告会・意見交換会に出されたレジュメの一例〉

- ⑦ 第1回のワークショップを開いた。なお、過去の実績からワークショップの開催が大変有効であるという認識のもとで本年度も今回を含め、計2回実施した。ワークショップでは東南アジア地域を研究対象として実際に現地滞在経験のある関西学院大学の学生4名に月曜班および木曜班への助言者となってもらい、グループディスカッションの中に入れてもらうことで詳細な情報やアドバイスを得るものである。ワークショップの前の講座では1時間を使い助言者に説明する「探究のこれまでの経験」や「質問・相談事項」などをまとめる時間とした。

ワークショップの中で、現地での生活を経験した方ならではの詳細で具体的な内容の知見や今後の探究についての助言も多く得ることができ、満足度の高い時間となった。



〈これまでの探究活動の説明〉



〈TA よりアドバイスを受ける〉

- ⑧ 第2回のワークショップを開いた。今回も月曜班、木曜班それぞれ前回のワークショップに参加いただいた方と同じ関西学院大学の学生4名に参加してもらった。ただし、今回は中間発表の準備期間と位置づけた。すなわち、各チームから中間発表のつもりで発表してもらい、学生4名には中間発表の内容を聞く側、第3者の立場としてアドバイスを受ける。発表の内容は勿論のこと、発表の仕方まで詳細なアドバイスを受けた。

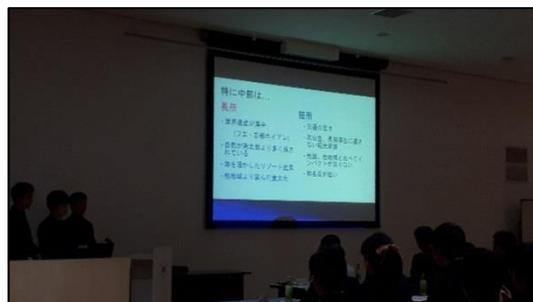
ワークショップ後、得た内容を基に論理構成の再構築を行わせた。そして、プレゼンテーション時のスライドとして用いるパワーポイント資料の作成を経てプレゼンテーションの練習をし、中間発表の準備とした。



〈中間発表の練習〉

⑨ 本校内六稜会館で中間発表が行われた。発表は、パワーポイント資料も含めて日本語を用いた。各チームのタイトルおよび概要は下記のとおりである。

月曜	ベトナムチーム	「ベトナムを観光大国へ」
	インドネシアチーム	「インドネシアで五輪開催を」
	ラオスチーム	「大国の脅威に屈しないラオス発展のために」
木曜	東南アジアチーム	「東南アジアから学ぶ日本の教育」
	マレーシアチーム	「マレーシアの政策から考える南アフリカの格差 是正に向けた政策」
	シンガポールチーム	「日本におけるカジノ成功のために」



〈中間発表の風景〉

発表後に出席いただいている指導助言の先生方から講評をいただいた。その中では、課題そのものの不明瞭さ、実験・実証などのエビデンスの不足を指摘する意見も多かった。また、中間発表後、出席された指導助言の先生方にルーブリックに基づいた評価をしていただいた。その中でも高評価を得た「月曜インドネシアチーム」がSGH 課題研究発表会（主催：大阪教育大学附属平野校舎、1月12日実施予定）へ、同じく「月曜ラオスチーム」がSGH 甲子園（主催：関西学院大学、3月23日実施予定）へ代表として参加することが決定した。

⑩ 最終発表に向けて仕上げの段階に入った。まず、中間発表時のビデオを見ることによ

り、発表内容および頂いた講評を振り返ることとした。これにより、発せられた生徒達の反省は、先述の中間発表時の指導助言の先生方のご指摘内容を大変真摯に受け止めたものが多かった。

最終発表まで残り僅かな期間となっていたため時間外にも協力して効率よく自由探究を進めることとして、再スタートを切った。また、この期間の探究活動の中で、例年になかった試みが行われたので3点紹介する。

- ・街頭でのアンケート調査

月曜ラオスチームが、「ラオスの魅力」についての認知度・イメージをはかるため、平成30年12月のある日ある時間帯においてJR大阪駅駅前にて街頭アンケート調査を行った。アンケート調査は本年度に限らず例年本校内の生徒を対象サンプルとして行われてきたが、対象サンプルを校外に求めたのは私の知る限りでは初めてのことである。調査を手分けしておこなった結果、目標とする100人からの回収は想像したより早く終えたようである。

- ・来日されている東南アジアに暮らす方へのインタビュー

本校の指導助言を行っていただいている企業経営者の方の紹介で、インターンシップで来日されているマレーシア人、インドネシア人、マレーシア在住のスーダン人の方々3名を本校へ招聘し、月曜日および木曜日に課題研究の時間を利用して、現地人の視点から見た各チームの探究内容について率直な意見、感想をいただいた。実際に東南アジアに赴いて探究ができなかったことからすれば、大変貴重な経験である。



〈東南アジアで暮らす方へのインタビュー〉

- ・専門家への Skype を利用したインタビュー

木曜東南アジアチームは、「シンガポールの教育」について深い見識をお持ちの方（都内の大学で「教育学」について研究されている）とメールを通じてアドバイスを受けていたが、これが発展して Skype を用いたチャットによるインタビューを行うことになった。限られた時間ではあったが、あらかじめ質問事項を整理しておいて臨んだため、生徒達にとって得るものも多く大変充実した内容となった。



- ⑪ 本校内六稜会館で最終発表が行われた。6チームとも、発表はプレゼンテーション発表のみとした。また、パワーポイント資料も含めて全て英語を用いた。各チームの最終発表時におけるタイトルおよび概要は下記の通りである。

月曜 ベトナムチーム

「ベトナムを観光大国へ」

ベトナムにおけるダナンを中心とする中部域はハノイのある北部域、ホーチミンシティのある南部域と比較して経済的に低い地位である。しかしながら中部域の持つ観光地的魅力を活かした南北縦断型の「クルージングトレイン」を運行することにより、中部域、牽いてはベトナム経済全体の底上げに結び付けたい。

インドネシアチーム

「インドネシアで五輪開催を」

世界一のイスラム人口、東南アジアの GDP をほこるインドネシアは昨年アジア大会を開催、国際的信頼を高めた。インドネシア国内の更なる発展やスポーツの普及のために、次はオリンピック開催を行うため必要な選考14項目に焦点を当て研究を進めた。

ラオスチーム

「大国の脅威に屈しないラオス発展のために」

ASEAN 諸国の中で唯一の内陸国であり、経済的規模も極めて小さいラオス。ラオスが拡大しつつある隣国の経済圏に飲み込まれることなく、自立して経済規模を拡大させる方法について提案したい。

木曜 東南アジアチーム

「東南アジアから学ぶ日本の教育」

シンガポールは近年 PISA によると世界トップレベルの教育水準であることが明らかになった。シンガポールで導入されている PSLE 制度について研究し、日本において導入できないか検討した。

マレーシアチーム

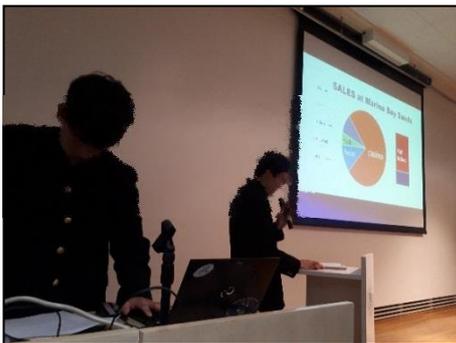
「マレーシアの政策から考える南アフリカのさらなる発展に向けた政策」

南アフリカ共和国とマレーシアは多民族国家という点で共通している。マレーシアにおいて失業率・貧困率を低下させることを目的にとられた政策を参考に、南アフリカにおける同様の問題に対応すべき策で経済的發展を促そうと模索した。

シンガポールチーム

「日本におけるカジノ成功のために」

「カジノ法案」の衆議院での通過、大阪万博の開催決定により盛り上がる IR（統合型リゾート）の大阪誘致。前期に考えたギャンブル依存症対策に引き続き、IR が大阪市にきた場合を想定して最大限の利益と経済的効果を生み出すための方策を検討した。



〈最終発表でのプレゼンテーション〉



〈発表後の最後の講評をいただく〉

出席いただいている指導助言の先生方から社会系・理科系・英語系にそれぞれ分かれて講評をいただいた。

社会系チームには以下のような講評があたえられた。

- ・プレゼンテーション力が中間発表時よりも向上している。
- ・提案する政策・アイデアについての検証まではしっかりできているが、それが社会・地域全体の発展にどう結びつくのかロジックが脆弱である。
- ・提案内容以外にすでに採用されている方針・政策についても十分理解を深める必要がある。そのうえで、提案内容の必要性を主張してほしい。
- ・探究するに当たり、3つの視点を持ってほしい。
 - 1つめ 上から俯瞰して全体にバランスのとれた内容になっているか。
 - 2つめ 1つ1つ詳細に課題を調べきった内容となっているか。
 - 3つめ 水の流れを読むかのように先の時代を読んで考えた内容になっているか。

生徒達は真剣に耳を傾け、あるものは一つ一つに頷きながらメモを取っていた。今後同様の探究活動をする際にはこの言葉の意味は活かされるであろう。

⑫ SGH 課題研究の総まとめとして論文の作成に取り掛かった。

各チームの発表を、ビデオを見て振り返ることとした。そのうえで、最終発表時の内容を大筋で踏襲することを基調としながらも、各チームの反省点を論文作成に反映させた。

論文の構成は 基幹となる「序論」「研究手法」「結果・考察」「結論」を明確に表現してもらうために、しっかりとその内容を書き出した上でまとめ上げることを指導した。

以上

〈成果〉

1. 132期2年生 課題研究後に実施したアンケートについて

今年度の課題研究 SGH 関連講座の取組に付いて、その成果を検証するために社会系の講座を受講している生徒38名を対象に2度のアンケートを実施した。第1回のアンケートは年度当初の課題研究の時間に実施し、第2回のアンケートは課題研究の最終発表会（平成31年2月2日実施）終了後最初の課題研究の時間を利用して実施した。以後、第1回のアンケートを事前アンケート、第2回のアンケートを事後アンケートと表記する。

アンケートの質問事項は関西学院大学社会学部の吉田寿夫教授からの委託による「SGH 生徒の成長の検証及びグローバル人材としての資質の検証」調査研究の質問項目に準じて設定した。その内容は以下（1）～（20）の通りであり、各質問項目について

4 そう思う 3 ややそう思う 2 あまり思わない 1 まったく思わない
の4つの選択肢で回答する形式とした。なお、事後アンケートでは、下記の質問項目を「以前より、……なった」の形式に直して実施した。

- (1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない
- (2) 海外でいろいろなことにチャレンジしたいと思う
- (3) 日本のことをもっと知る必要があると思っている
- (4) 開発途上国の文化や風土や政治経済の状況などについて知りたいと思う
- (5) 大学の先生や企業経営者と話をすることには抵抗がない
- (6) 東南アジアへの興味や関心を持っている
- (7) 東南アジア諸国への旅行や現地でのフィールドワークをやってみたい
- (8) 東南アジア出身の留学生と意見交換する機会を持ちたい
- (9) 将来は、仕事で国際的に活躍したいと思う
- (10) 地球規模で社会に貢献したいと思う
- (11) 卒業後は、海外の大学・大学院等で学んでみたいと思う
- (12) 世界的な問題について関心を持っている
- (13) 自分の考えを他の人に聞いてもらおうという思いが強い
- (14) 開発途上国の人たちと個人的に交流したいと思う
- (15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う
- (16) 人前で発表することには抵抗が少ない
- (17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う
- (18) 開発途上国の経済発展に貢献したいと思う
- (19) 日本がより望ましい国になることに貢献したいと思う
- (20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う

① 132期生対象アンケートの年間推移の分析

以下の表は社会系講座選択の受講生からのアンケートに対する回答である。各質問項目の番号の数値化によって、項目ごとの平均値を算出した。表1は事前アンケート、表2は事後アンケートの平均値、表3は2つのアンケート結果の数値の差である。

表1 132期生 SGH 社会系 課題研究事前アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.84	3.61	3.58	3.61	3.03	3.32	3.50	3.41	3.55	3.19
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.95	3.47	3.34	3.26	3.92	2.87	2.29	3.21	3.53	2.29

表2 132期生 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.78	3.70	3.73	3.35	3.19	3.32	3.51	3.22	3.57	3.30
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.97	3.54	3.14	3.08	3.95	2.95	2.51	3.30	3.54	3.05

表3 132期生 SGH 社会系 課題研究アンケート 項目別増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
-0.06	0.09	0.15	-0.26	0.16	0.00	0.01	-0.19	0.02	0.11
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.02	0.07	-0.20	-0.18	0.03	0.08	0.22	0.09	0.01	0.76

また、各項目ごとに回答番号の割合をグラフ化したものが図1および図2である。

図1 132期生 SGH 社会系 課題研究事前アンケート 質問項目別回答分布

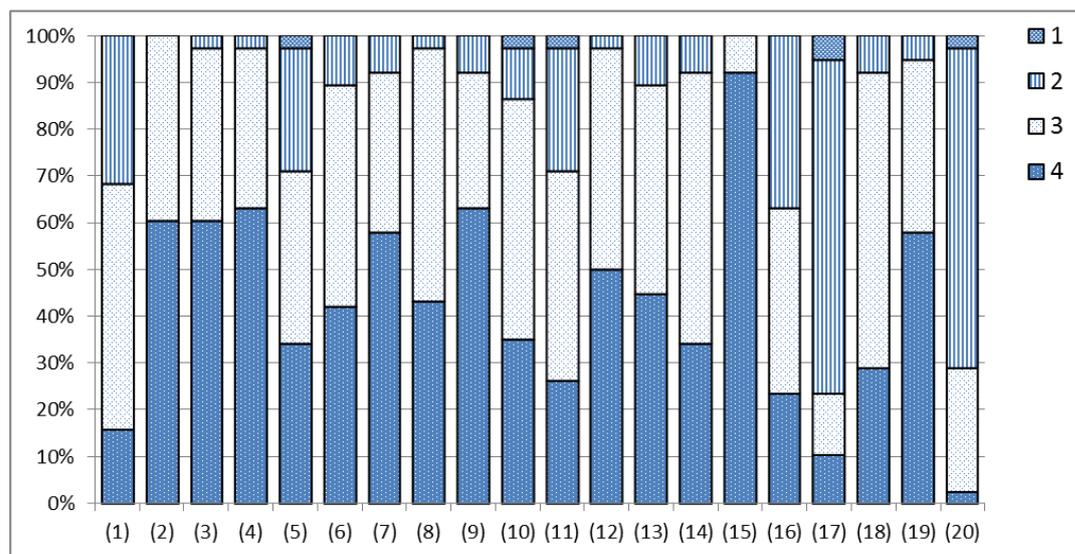
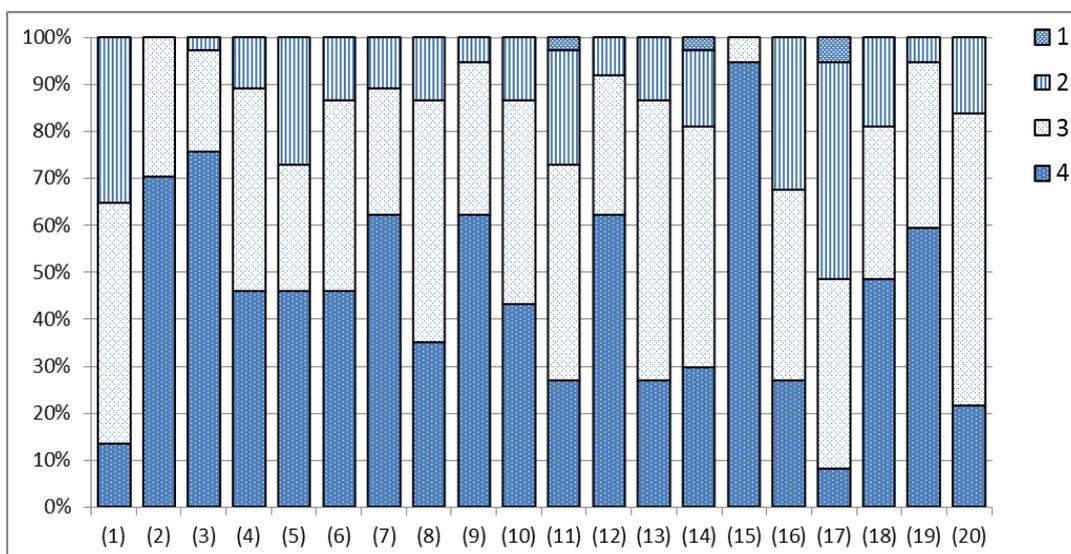


図2 132期 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目別回答分布



以上の数値をもとに、特徴的な項目を抜き出し、その背景について以下のように考察した。

i 表1と表2より、アンケート全体では、年間を通した大きな変化は見られなかった一方で、「(20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。」の項目は0.8ポイント増加した。図1および図2からわかるように、事前アンケートでは70%近い生徒がこの項目に対して「あまり思わない」と考えていたが、研究を通して「ややそう思う」へと意識が変化している。他の数値に大きな変化が無い中でこの数値は有意な変化であると考えられる。

ii 2度のアンケートのどちらにおいても肯定的回答の割合が高い質問項目は、「(15) 英語によるコミュニケーション力を高めたいと思う。」であった。最終発表は英語で行われたがそれまでの調査活動においても英語を用いた探究活動が活発に行われていたため、そうした活動を通して英語によるコミュニケーション力向上へのモチベーションが強化されたと考えられる。

iii 2度のアンケートのどちらにおいても否定的回答の割合が高い質問項目は、「(1) 英語でのコミュニケーションには抵抗がない。」であった。最終発表に出席された指導助言の先生方からは「この数年間で発表における英語力は格段に向上している」というコメントをいただいております、英語の資料も活用した探究活動を行っているにもかかわらずこのようなアンケート結果になったことから、生徒が自信を持ち、抵抗感なく英語でコミュニケーションを取れるような機会を増やすことが必要であると考えられる。

iv 事後アンケートにおいて肯定的回答の割合が大きく増加した質問項目は、
 「(17) 将来は、国連や国際NGOなどの国際的な機関で働きたいと思う。」
 「(20) 現在の段階で、課題を発見し、分析する力がついていると思う。」
 の2点であった。(17)に関しては探究をすすめるなかで、国際的な機関についての具体的なイメージを得ることができたのではないかと考えられる。(20)については、テーマ決定に時間をかけたことや、授業時間外でも積極的にグループでの活動を行っていたことなどが影響していると考えられる。

② 131期生(平成30年度新3年生)対象事後アンケートとの比較

平成29年度にSGH関連講座社会系を選択した生徒26名を対象とした事後アンケートの結果との比較である。質問項目は平成30年度と同様である。表4は131期生事後アンケート、表5は131期事後アンケートと132期事後アンケートの差(経年変化)である。

表4 131期生 SGH 社会系 課題研究事後アンケート 質問項目平均値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
2.71	2.75	3.13	3.17	2.71	3.29	3.08	2.83	2.79	2.79
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
2.42	3.25	2.96	2.58	3.63	3.08	2.42	2.79	3.04	3.13

表5 131期生および132期生 比較増減値

(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)
0.07	0.95	0.60	0.18	0.48	0.03	0.43	0.39	0.78	0.51
(11)	(12)	(13)	(14)	(15)	(16)	(17)	(18)	(19)	(20)
0.55	0.29	0.18	0.50	0.32	-0.13	0.09	0.51	0.50	-0.08

以上の数値をもとに、特徴的な項目を抜き出し、その背景について以下のように考察した。

表4と表5より、アンケート全体では132期生の数値が大幅に上昇している。一方で132期生は事前アンケートと事後アンケートの数値に大きな違いが見られないことから、132期生は年度当初の時点で関心・意欲が131期生よりも高かったといえる。この背景には諸外国に対する生徒の関心の高まりや、1年次の国際情報の授業の充実などがあると考えられる。

2. 研究ノート、振り返りシートおよびアンケートの自由記述欄に見られる生徒の変容

前節〈内容〉で述べたように、社会系の講座では毎時の活動に合わせて項目にアレンジを加えたプリント「研究ノート・メモ」への記入を求めた。また、中間発表会や最終発表会および外部で発表を行ったチームには「振り返りシート」の記入を求め、次回以後の探究活動に向けての方向性を見出せるような指導を行った。

この項では、それぞれの研究ノートや発表機会ごとの振り返りシート、前述の事前・事後アンケートの中から特徴的な事例を取り上げる。

① 事前アンケート

- ・経済成長などとその国の人々の暮らしの関係性を調べてみたい。(経済、政治と身近なことの関係)
- ・現地には事実上フィールドワーク等に行けず専門家や文献、時にはインターネットに頼るしかない以上どこまで調査対象国を深くまで追求できるのか。
- ・東南アジアの方々に直接お話しを聞く機会は貴重なので、どうしても本、インターネットで調べることが多くなり、実態に沿わなくなってしまうこともあると思うので気をつけたい。

② 進捗状況報告会・意見交換会 他のグループへの感想

(前節〈内容〉3 活動詳細の⑥の活動)

- ・今後日本がより多民族になることを想定して、日本の進むべき道を考えるというアイデアが良かった。
- ・図は年数などの長さを見た目でわかるようにしたほうがわかりやすいと思う。
- ・民族・教育の関係という観点で調べていくのは面白くてよいと思う。ただ、広すぎるのではないか。最終目的を見失うことになりそう。
- ・マレーシアとシンガポールという民族面における政策の路線が180度異なる2カ国を対象国に選んだのは評価できる。

◇この意見交換会では、他のグループの発表についての意見の中で、個々の事実関係についての意見や質問よりも、研究の方向性や意義など俯瞰的に捉えた意見や質問が活発に出ており、探究活動を客観的に検討できていることが伺える。

③ ワークショップ感想

(前節〈内容〉3 活動詳細の⑦および⑧の活動)

- ・実際に東南アジアの学校に行った学生さんに話を聞くことができ、どのような調査が必要か考えることができた。
- ・現地の具体的な制度についてたずねるために、現地の人を紹介してもらえた。

④ 中間発表後の振り返りシートに記載されたコメント

- ・中間発表を意識して発表に必要な調査を絞り込んでおく必要があった。
- ・話すスピードが速すぎたので最終発表までに改善する。スライドも見やすく工夫する。

⑤ 外部での発表について振り返りシートに記載されたコメント

1月大阪教育大学附属高等学校平野校舎 月曜インドネシアチーム

〈自分たちの発表を終えて気付いた点〉

- ・自分が思っているよりもゆっくり話さないと、早口になってしまうこともあると気付いたので、次からは相手が聞き取りやすいように話そうと思う。
- ・オリンピックの真の目的である「スポーツを広める」ということを考えてなかった。

〈他校のポスター発表や口頭発表で参考になりそうな点〉

- ・大教大のプレゼンテーションは根拠や結論がとても信頼できるものだった。私たちのプレゼンテーションは表面的で深いところまで追求できていない部分が多かったなど反省した。
- ・調べるまでの過程→実験→考察の流れがしっかりしている。

⑥ 事後アンケート

- ・国外の調べものをするにおいても英語が必要で、英語力を身につけることが必要だと思った。また、思ったことを魅力的に伝えるには、プロセスを伝えることも必要だと感じた。
- ・どのようにパワーポイントを作ったら相手に伝わりやすいかなどをいつも以上に考えるようにした。オリンピック開催を提案するうえで、オリンピックのことだけを考えればよいのではなく、その後の発展にも目を向けるなど、先を見通す必要を学んだ。
- ・自分たちでテーマを設定して、研究を行うのでなかなか前に進まなかったが、暗中模索しながらなんとか結論にたどりつけた。答えが色々ある中で、自分たちなりの答えを見つけるのは難しかったが、その難しさの中に楽しさを感じられたと思う。
- ・パワーポイントの作成力、英語で発表する際はよくできたと思う。作成する力は格段に上達した。物事をよく考察して結論を導き出す力もついた。
- ・課題を自ら見つけ出し、その対象について思考を重ね、様々な情報を集め選びだし、それらを順序立てて論理的に組み立てることを経て、将来の卒論や仕事の基礎を体得できたと思う。
- ・調査力と英語力。課題についての論文検索などはやったことがなかったが、以前よりもうまく調べられるようになった。人前で英語を話すことに抵抗がなくなった。
- ・課題を見つけ調べる、そしてそれを整理し、解決策や案を考える。それを人に伝える、また発表して反省点を分析し、新しい方法を考えるというようなサイクルが身についたと思う。